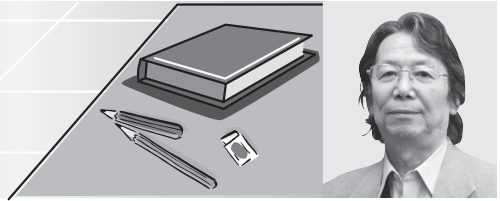


# 学生時代と図書館 83

## —魅惑する小宇宙—

宇城 由文



大学時代の図書館、そこには小宇宙が凝縮されていた。現在のインターネットの世界に近い。その違いは、野放図に集まったのではなく、一定の指針のもとに選択された文献が収集されていることである。

日本の秘境熊野の山深く、そこで私は育った。春秋冬は野山を駆け巡り、夏は日暮し川に遊ぶ、明るいうちに家に帰ることはない。夜も時間はたっぷりある。小学校は人も通わぬ深山の頂にあった。中学校は平地にあったが、田舎であることに変わりはない。テレビもない時代、図書室の本は1年もあれば読みつくしてしまう。高校は海辺の街にあったが、図書室に通った覚えはない。書店のおばあちゃんとお友達になり、読書はもっぱらそこで済ませた。雑誌の面白さを知ったのもこの頃である。人生でもっとも勉強をしたのは小学校5・6年の頃、学問にもっとも真剣に取り組んだのは大学の3・4年の頃、1・2年時のアルバイトと奨学金で生活の心配はなかった。以来随分時が流れた。しかし、生活が頭の片隅にある学問というのはどうにも具合が悪い。

大学に入学して間もない頃、図書館を訪れた。検索カードが入った木製の棚が侵入者を圧倒する。立ち尽くしていると優しくお爺さんに声をかけられた。

「卒論は何をやるの」

当時の私は10歳以上老けて見られた。

「川柳です」

行き当たりばったりの返答で、高校時代の趣味を挙げた。この図書館に川柳に関する貴重な資料がどれほどあるかを優しく丁寧に教えてくださった。数日後、そのご老人の姿は教壇にあった。研究への道は図書館での出会いから始まったような気がする。1年次の科目から発表があり、準備に半年はかかった。3年次からは各授業5～10名、先生が居眠りをしている時以外は手抜きはできない。放課後はクラブ活動のような形で各時代の自主ゼミ（「輪講」と呼んでいた）があり、学年を超えて徹底的に「訓詁注釈」を鍛えられる。鍛えるのは先輩とボランティアの教授陣である。

これも発表の際にはひと月以上の準備を要する。卒論の出来で4年間で評価される。3名以上の教授陣相手の口頭試問は一人15分～3時間、目を赤くして控室に戻る学生も珍しくない。おのずから図書館通いも頻繁になる。和書、なかでも江戸時代の文献は東洋一と言われていた。目前に存在するのだから見ていませんでは通らない。草書で記された文献はなかなか読み応えがある。入門時の学生はこれに泣かされた。3・4年次になると版本に江戸時代の息吹を感じられるようになる。洋装本も、文学・語学関係で学生が利用するようなものはほとんど揃っていた。各大学の紀要や研究雑誌も揃っていた。暇な時は検索カードを繰って遊ぶ。同じ事項に対して様々なタイトルや副題がつけられている。見ただけで世界が広がる。3年次も終わる頃になると下宿と図書館を往復する生活で、楽しいだの面白いだのと思うゆとりはもうない。ただただ卒論の重圧がのしかかり憂鬱な日々が続く。卒論が終わる頃には、二度とこんな苦しみはいやだと思ってしまう。

高校教師を経て再び学生に戻る。大学も図書館も変わったが、図書館の必要性は以前にもまして大きくなった。修論のテーマは江戸時代の俳諧、一人の俳人の人生を追っかけたもので、全国の図書館、資料館、個人蒐集家を訪ねる旅が始まった。江戸時代の資料はコピーをすると傷むので、写真撮影をしたものを紙焼きにする。一枚につき100円を要した。金はない、時間も限られている。さあ困ったと悩んでいると、親切的な図書館の方から図書館の相互サービスを活用することをご教示頂いた。全冊の写真版をまず図書館に入れ、それを製本する前に私にコピーさせてくださったのである。これだと十分の一の費用で済む。しかも交通費も時間も節約できる。図書館の方が神様に見えた。

ある時は旅人に、またある時は探偵に、黴臭い空気を別にすれば図書館は夢を自在にふくらますことのできる素敵な小宇宙である。

うしろ よしふみ（教授・近世俳諧史）